草わかば

蒲原有明

青空文庫

目次Ⅰ

例言 3
靈鳥のうた 10
佐太大神 11
新鶯曲 13
紫蘇 14
戀の園 14
歡樂 15
幻影 16
さいかし 17
星眸 18

小鳥 19
光の歌 19
名珠餘影 20
獨語 22
ゆふづつ 14
夕かげ 15
問ふをやめよ 16
憂愁 16
かたみの星 17
追憶 17

目次Ⅱ

かすかに胸に　18
草莽蕪頌　19
高潮　20

やさしきこころのうちに愛のひそむは、森のみどり葉がくれに鳥のすむに似たりといふなるに、このはかなき草わかばのかげにはいまだ夢さそふにほひもなきがごとく、わが調に慣れぬ胸のおもひは、色をも彩をもなしあへぬをいかにせむ。

春の歌

歡樂(よろこび)ふかくもえいづる
香を慕ふにも草嫩(くさわかば)
細き葉がくれ身をよせて
羞(は)ぢてひそめる花の影

羞ぢてかくるるさまながら
花はほがひのよそほひや
空には夢のたはぶれの
紅こそ淡くかかるなれ

唇(くちびる)を解(と)く歌の君
春のたくみの手は高く
夕にはまた彩(あや)を織る
光は雲にながれけり

日神頌歌

いのちのねざしうるほへば
ここなる花もかをるなり
文布織(しづりお)ります羽槌雄(はづちを)の
神の高機(たかはた)しののめに
いろあやとくもととなひて
影かすかなり星の梭(をさ)

雲はいと濃き紫に
うすくれなゐの糸をぬき
高野路夢(たかのぢはなげし)の花罌粟の
つぼみひらくる曙や
げにかぎりなきよそほひの
榮(はえ)あふぐこそゆかしけれ

いとものふりし冬の夜の
幽宮(かくれのみや)のまゆごもり
もぬけいでては天の原
春の霞のもろつばさ
まだかよわげに見ゆれども
おほはぬ空もなかりけり。

夜の闇消えてゆく空に
見よ白鳩の羽(はね)を矧(は)ぎて

にほふ桂の眞鹿兒矢の
生矢千箭の靫を負ひ
日女の神は春かへる
かの稚宮にいでましぬ

御統の玉おとたかく
天にきこえて曉の
星の光のゆらぐ時
この世なやめる人の身も
こごえし靈もやはらかき
春の日影にむかへかし

をりこそよけれ常世なる
甘き菓の新醸
碼瑙の谿にしたたれば
わきほとばしる白泡の
にほふがごとくみなぎりて
光さしそふ日のみ神

ああうるはしき日※貴
まだ天地のわかくして
影清かりし朝ぼらけ
遠き光を身にしめて
誰か高市に神集ふ
神のみ聲をこの日傳へむ

をとめごころ

手にふれたまふことなかれ
うれしき君とおもへども
まだうらわかき野の花は
熱き情の日にたへじ

ゆめふれたまふことなかれ
いといともろきわが胸に
激浪たちて白珠の
涙くだかばつらからむ

ただふれたまふことなかれ
祕めてぞ清き戀なるを
もしかかる夜に罪やどる
星墜ちゆかばいかにせむ

新譜

其一

おもふに夢に
おもふに夢に誰かわが

手にふれたりや知らぬまに
空はかすめる夢としも
げに春はこそいふべけれ

知らですごしぬこの日まで
その祕(ひ)めごとを歡樂(よろこび)を
さあれ知りてはやすからず
ああわが胸のいつになく

おもふに誰かめづらしき
たよりを夢に傳へけむ
かしこよりとしたのむにも
あやなく雲ぞかすみたる

嗚呼さばかりに何ゆゑに
あくがるるわがおもひぞや
微草(をぐさ)よなれもゆかしげに
もゆるは何の夢ごこち

おもふに春にいづこより
遠き調の傳ふとも
幽(かす)かなるべき絃(いと)にだに
うらわかみこそ觸(ふ)れもすれ

色し慕へどわりなくも
香をし戀ふれどさながらに
されば少女(をとめ)のわがこころ
寤(さ)めてかつひに夢みてか

其二

野路よりひとり

野ぢよりひとりかへり來て
あやしくなぞやはづかしき
髪にかざしし草の花
それさへ祕(ひ)めてえも見せじ

髪にかざしし草の花
色さへ香さへさとらせじ
見せよと人の強(しひ)ていはば
しづかに胸にひめてまし

靜かにさらば祕(ひ)めてとか
ああいつはりぬわれながら
春日(はるび)あまりに樂しくて
かくこそ胸はさわぐなれ

浪だつ胸にたよりつつ
花は眠りてあるならむ

よしや夢みてさめずとも
つらき人にはえも見せじ

彩雲

春うらわかき追憶(おもひで)に
空のこころもかすむ時
雲は流れて古歳(ふるとし)の
よろこびにこそかへるなれ

ああその影のいと淡き
光に榮(は)ゆるくろかみの
少女が櫛(くし)に匂ふごと
輕げにとくるすがたあり

ああそのかげの靜けさや
たとへば遠き海原(うなばら)に
小島(をじま)うかびてみゆるごと
愁(うれひ)にさわぐ浪の外

われや野の空うちあふぎ
いつか嘆(なげ)きを忘れけり
なげきよりこそ人沈(しづ)め
春の彩(あや)ある雲を見よ

さてしも情(なさけ)いと熱(あつ)き
胸のしろきにくらぶれば
げに觸(ふ)れがたきたのしみの
夢かよふなり春の雲

あくがれたちてながむれば
乳(ち)の江(え)をゆく船に似て
また見かへせばうまざけの
大海(おほうみ)にこそ浮びけれ

誰かおもはむこの時し
なかぞら高き紫の
雲ゆふまぐれ消え去りて
幻影(まぼろし)つひにたえむとは

榮(はえ)ある幸(さち)よゆくすゑを
おもひわづらふこともなく
雲もながれて古歳(ふるとし)の
よろこびにこそかへるなれ

春の野べ

わかやぐひかり野べのいろ
しらべもかすむ春のうた
あはれこの世にいくちとせ

人はなさけの香を慕ふ
たのしや遠き古の
その日に空の彩を見し
小琴もけふはよろこびの
まためづらしき音にたたむ

暁ひとり消えてゆく
星よ雲ゐの路すてて
しばしは人の世にくだり
めぐらばいかに春の野を

ここには匂ふ若草に
ゆらめくいきももゆるとき
よろこび慕ふ胸にしも
熱きおもひはやどるなり

花野は盾のひとおもて
大神の手のたくみぞと
夢よただへてわづらひの
征矢鳴りやめるかげにかくれむ

戀ぐさ

さにてはなきや昨日こそ
冬のあはれはこもりしか
古井のかげよ今日はまた
追憶深き草の花

追憶ふかき草なれば
菫やさしくにほふなり
やさしく匂ふ花なれば
そのこころさへ慧からむ

されば知れりや歡樂の
泉にかかる琴のねを
ここには誰ぞ彈きすてて
世はすがきのみだれのみ

さてしも難きよろこびや
かくも忘れし祕めごとや
いやまし人は嘆く日に
匂ひは深き花すみれ

常磐の緑葉をかさね
森の香いかに高くとも
汝がにほはしのくちづけに
われはかへじよ花すみれ

神のこころはほのかにて

人知る際にあらねども
いくよ忘れし思ひさへ
ただこの花に忍ばるる

げに世は夢よ歡樂の
泉はつきてかへらねど
古井のかげの戀草に
なほ新しきにほひあらずや

君やわれや

海に來て戀をおもへば
わが戀はみだるるうしほ
君にゆき君にむかへば
わが身たださみしきおもひ

わが情君がなさけに
ふたつもしくらべみるとき
いかでわが青沼の水
君が野のいづみに如かむ

南の花の香か
浪ひびく夢の小笛か
君はこれにほひの身なり
君はまたしらべのすがた

われはまた樹の間の小鳥
君が眼の空にかかれる
うるはしき瞳の星の
色すめるかげをぞたのむ

かくてわが命の甕に
濁汲むひくき流も
君が戀ほのほはげしき
海にこそ注ぎいでしか

君はまた常住のよろこび
緑なるつきせぬ廣野
その廣野君が狩くら
狩くらにわが身迷へり

わがなやみ君がよろこび
わが愁ひ君が琴のね
白銀の獵矢を君は
小男鹿の痛手ぞわれに

君が戀あまりに高く
黄昏も知らぬ光や
浮雲のかげにもあはれ
たふれゆくわが身およばじ

牡蠣の殻

牡蠣の殻なる牡蠣の身の
かくもはてなき海にして
獨りあやふく限ある
そのおもひこそ悲しけれ

身はこれ盲目すべもなく
巌のかげにねむれども
ねざむるままにおほうみの
潮のみちひをおぼゆめり

いかに黎明あさ汐の
色しも清くひたすとて
朽つるのみなる牡蠣の身の
あまりにせまき牡蠣の殻

たとへ夕づついと清き
光は浪の穂に照りて
遠野が鴿の面影に
似たりとてはた何ならむ

痛ましきかなわたづみの
ふかきしらべのあやしみに
夜もまた晝もたへかねて
愁にとざす殻のやど

されど一度あらし吹き
海の林のさくる日に
朽つるままなる牡蠣の身の
殻もなどかは碎けざるべき

樹蔭

いまだ葉守の神わかく
枝うちかざし風呼べば
わかるる人もしばしとて
夏は樹蔭を慕ふらむ

さればきのふのわが春よ
草ひきむすびやすらひて
若葉かがやくかげにこそ
過ぎし夜がたりつぐべけれ

潜むは何のこころぞや
その葉がくれの夢にだに
春よ消えにし花の面
淡げにのみも見えよかし

青野花草

野路(のぢ)は戀路(こひぢ)にあらねども
野草(のぐさ)は熱(あつ)きあくがれに
みどりの夢のそのいきの
はげしく深き夏の野べ

かなたに消ゆる世のかげの
みだれはここにをさまりて
青野花草(あをのはなぐさ)日にとくる
白銀(しろがね)の音に似たりけり

光は高き洪水(おほみづ)に
この時ひとりただよへば
聲も傳へぬ深海(ふかうみ)の
小舟(をぶね)の身こそをかしけれ

かしこ港やいと清き
おもひぞ泊(は)つる青葉かげ
かしこ盡きせぬ眞珠(しらたま)を
さぐるもよしや野のいづみ

戀ぢは野ぢにあらねども
なやみの草の夏しげき
かげにもなどや靜けさの
よろこび深き夢のなからむ

枳殻

浪を劃(かぎ)りて磯濱(いそはま)に
乾(かわ)ける沙は誰が置きし
へだつればこそ君が家(や)に
枳殻(からたち)の墻(かき)恨みしか

雨緑野(あめみどりの)に鳴り歇(や)みて
皐月(さつき)風なく日は蒸(む)しぬ
垣根いといとしめやかに
けふ枳殻の花一重(はなひとへ)

一重に白き花あはれ
一瓣(ひとよ)にこもる夢あはれ
身は卑(いや)しくて思ひのみ
繁(しげ)きわれにはなど似たる

われや佇(たたず)む夕まぐれ
嘆くと知れる君ならず
もとより門(かど)の枳殻の
花をし愛(め)づる君ならず

あまりある血をいたづらに

青葉の下に冷さむや
一たび君がにほひある
こころの底に染めてこそ

可怜小汀
鴎に寄する歌

何とはなしにはてもなく
昔にかへるわが身かな
おもふはその日旅の空
すでに三歳を過ぎにけり

その日は海の夕まぐれ
わが船浪に漕ぎくれば
鴎つばさは白くして
ひとり汐げの闇をゆく

苦吟あやめもわかぬ時
靈光頭を射るごとく
鴎よはじめ汝を見て
心竊かに驚きぬ

鳴呼塵染めぬ翅かげ
わが身を納れよかくばかり
愁ひはさわぐ激浪の
やみがたくしてすべぞなき

鴎よ行方遠からむ
消え去るかげを惜めども
可怜小汀のいづかたを
汝が戀ふとしも知らざりき

おもひはつきずある夜また
夢に潮の流れ來て
大海とほくかぎりなき
そのはてをしも慕ひけり

可怜小汀か甲斐なくも
問ふはいくたびそもいづこ
八汐路難き沖の上
夢浮舟のすゑ悲し

鴎よかくてはてもなく
昔にかへるしばらくは
白き翅にさそはれて
胸ゆらぐこそあやしけれ

菱の實採るは誰が子ぞや
菱の實とるは誰が子ぞや

くろかみ風にみだれたる

菱の實とるは誰が子ぞや
ひとり浮びて古池に

鄙歌のふしおもしろく
君なほざりにうたふめり

聲夢ごこちほそきとき
きききまどふこそをかしけれ

かごはみてりや秋深く
實はさばかりにおほからじ

菱の葉のみは朽つれども
げに菱の實はおほからじ

かごはみたずや光なき
日は暮れてゆく短かさよ

なほなげかじなうらわかみ
なさけにもゆる君ならば

君や菱賣る影清く
はしる市路のゆふまぐれ

そのすがたをば憐みて
ああなど誰かつらからむ

君がゑまひの花かげに
ふれなばおちむ實こそあれ

うるはしとおもふ實のひとつ
いつかこの身にこぼれけむ

旅ゆき迷ふわづらひも
しばしぞ今は忘らるる

あやしむなかれわれはただ
なさけのかげを慕ふのみ

さながらわれは若櫨の
枝に來て鳴く小鳥のみ

ゆふづつ

『祈祷あげよ』と星の界の
少女の一人その聲よ
愛の泉のしたたりや

その聲よまたさながらに
聖なる小河うち掩ふ
蘆葉さやぎのひめごとや

その聲音こそすみわたる
光の海の遠浪の
天いと深く傳ひゆけ

『いざ祈祷をぞ榮おほき
つとめ』といへばひざまづく
靈の身かげのまた二人

一人は高きよろこびに
黄金彩雲とほ空の
底にかがやく色を讃め

一人は殘る愁ひより
紫濃雲故里の
界をしまとふとなつかしむ

二人おもはずかしここそ
ああ夕まぐれわが界はと
言はむのまどひさてやみぬ

祈祷はつひにつとめはて
高榮めぐる聖燭の
焔もここにともされぬ

見よ聖燭の火は生ひぬ
熾りぬ照りぬ（嗚呼何ぞ
人の世われに夕短かき）

夕かげ

かの紫の夕雲に
かの黄昏のさびしさの
あふぎ見るだにたへがたき
いろこそ深く染めにけれ

彩ある雲に慕ひよる
愁ひの影の夕暮の
魂の少女のくろ髪の
にほひもあらぬ空のうへ

我が胸にしもさらばまた
黄金の色のかはりはて
追憶つらきかたみなる
みだるる髪のかからずや

みだるる髪はかかるとも

わが手にさぐるちからなく
ひとりもだゆるこころより
ただ大空をながめけり

沈むこころの海原の
浪の響はさはあれど
闇なる痛みたへがたく
聽かじとするにすべもなし

わかき血潮はしづみゆく
わが身にもなほ戀あらば
高きみ座にかなしみの
聖燭添へむわがねがひ

問ふをやめよ

かがやきわたれる星のかの界
いづれの光もいと慕はし

さはあれひとへにわけてめづる
ゆかしき影こそ胸は照らせ

いろ彩となふ虹のごとく
そのかげ天より地にわたり

すぎにし歡樂いにしうれひ
やすみの園生に夢をさそふ

かたらひ契りし少女の名に
夜ごとよびさます星は照らす

少女はうせしや墓はいづこ
わが星いづれと問ふをやめよ

憂愁

はてなき空を流れ去りて
星の光も消ゆるごと
愁ひのかげは時として
胸ふかくこそおちにけれ

わがよろこびは新草の
野べとしおもふその日だに
命の榮の花もなく
夕影などや沈むらむ

愁ひのかげは掩ひ來て
闇となる身のはかなしや
幾世なやみの羽音さへ
さても聞きしるわがこころ

げに人の世のことわりの
深きにほひもたそがれて
浅瀬すべなきわづらひの
流に夢はみだれけり

魂の身かをる桂がげ
天なる光戀ふれども
身はいたづらに沈みゆく
卑きなやみをいかにせむ

かたみの星

光はにほふ天の香を
慕ひしたひしたのしさに
薔薇の宮となづけつつ
めでにし星も墜ちてけり

こよひは清き愁ひより
うるほひひらく影見れば
百合の宿座とよびかへて
ふたたび空にあくがれむ

追懐深きかがやきぞ
迷ふわが身のたよりなる
さればよ照らせ荒磯に
また闇沈む墓かげに

追憶

光かすかに日は落ちて
愁はせまるゆふまぐれ
またうちさわぐわが胸の
ものおもひこそあやしけれ

つつむは何のこころぞや
憶ひいづるぞさてはよき
夕なごりのしづけさに
しばしはあはき影ひけよ
野の曙をわれ趁ひて
醉ひて過ぎしも夢なりや

さしもつつみて何かせむ
憶ひいでずばかひなしや
ただかりそめに星讃めて
ただ麗しき人すごし
ほのぐらき路ふみゆけば
熱き血しほも冷えにけり

さあれつつむに忍びむや
憶ひいづればたのしきを

樹杪わかるる光こそ
雲にかくれてゆきにしか
今宵は昔たえはてし
清きしらべもかへり來よ

つつむといふもこころから
ああまたおもひいでてまし

嗚呼かの野邊のかたらひや
その幸常久に盡きざれば
よろこびの華褪せずして
生命の草もにほふなり

つひにつつむにたへがたし
おもひいづるぞさてはよき

かすかに胸に

かすかに胸にけふはまた
むかしの海の響すと
ひとり寂しきうたがひに

山邊の翁つぶやける

山邊にかくは齡老いて
遠きおもひもあらざりき
今日しいかなるたはむれぞ
翅は生ひぬわが夢に

雲に彩あり高嶺なる
あらき巖をつつむとき
榮よ樹かげをはなれゆきて
夢の翅ぞ匂ふなる

憂さいぶせさは谷の奥
かくて忘れつ故郷を
かなたに今はひたすらに
海の響をきかむとす

幽かなれどもわかやかに
漲りわたる大海の
その音なひよ歡びの
わが日むかしの歌の聲

觸れてこそまたなつかしみ
ふるるによけれ何日までも
されどわが世の磯濱に

浪はひとたびすぎしのみ
浪は砕(くだ)けてすぎけれど
今はた聞けば後(のち)の日の
すさめる胸の追憶(おもひで)に
海のひびきのゆかしきを

何今更(なにいまさら)にたゆたひて
夢の翅(おとろ)の衰ふる
獨りかくてもおくつきに
とくいりはてばいかにせむ

嗚呼また一重(ひとへ)しほからき
狭霧(さぎり)ひらかむ夢もがな
舊(もと)の渚(なぎさ)のさのみやは
いつまでわれに見えぬらむ

白晝(まひる)のをりの眞砂路(まさごぢ)に
潮(うしほ)の華(はな)の明(あき)らかに
映(うつ)りしさまを戀ふれども
つらくすべなくなりぬめり

嗚呼堪へがたし遠海(とほうみ)の
とよみむなしく聽てあれば
そは似たりけりかの媚(こび)に
あだなる人の私語(さざやき)に

すべて忘れてありつるを
夢よいかなるいつはりぞ
翅もつひに沈むまに
をぐらくなりぬ空のはて

草莽蕪頌

よろこび
なれがゆらめく高(たか)むね
大海原(おほうなばら)にゆきめぐれる
潮(うしほ)なれやさこそ
光にみちてもあふるるなれ

よろこび
なれがにほへる唇(くちびる)
かの曉に天(あめ)あけゆく
焔なれやさこそ
熱き絃(いと)ふるへ音(ね)にたつなれ

よろこび
なれがすがたや何なる
望(のぞみ)に照れるそのよそほひ
さればさればさこそ

いといと高きをたたふるなれ
東方
ここに國するよろこび
高日続れる黄金御座
ああ誰かはここに
み座のにほひを仰がざらむ

くにたみ
われらささぐる讃歌
せめて眞白き翅とらば
ああ御輩めぐる
この日の榮もて天かけらむ

よろこび
なれがねがひはくまなく
かがやく幸やそのもろごゑ
さればさればさこそ
いといと高きをたたふるなれ

高潮

曙のうた

漲り披く千重の浪
憊るる色は更になし
擁くは勁く張りし琴
音の高きに副へばなり

深き遠きを問はずして
胸によろづの聲を籠め
夜を傷みて夢おほき
人の世の岸洗ひ去る

曙に海鳴りわたれ
鳴りわたれ海あけぼのに
磯うち湧きてあがり
溢れて沙噛めよ

暁の星あふぎ見て
舒びていざよふ雲の君
にほひ含める唇に
讃むるは朝の光なり

暁の空いと清く
明けゆく雲はやすらひて
彩ある榮の光こそ
その胸にしもうつりけり

曙に風吹きかへせ
吹きかへせ風あけぼのに

高きに光纏ひ
微かに淨く拂へ

愁は谷の霧なれば
思ひは暗き澤がくれ
かなしみ細くいと苦き
小草を把りしわが身さへ

高潮滿ちて繞りゆく
海のほとりによみがへり
雲は匂へる朝ぼらけ
生るる靈の幸想ふ

曙に海鳴りわたれ
　鳴りわたれ海あけぼのに
豐かに遠く湛へ
流れて岸に觸れよ

海に映りつ輝きつ
雲あひ牽きて影逐へば
母なる地の歡樂に
塵もこの時また聖し

流轉よ暫時たちかへり
翼收めて虛空に見よ

野の花わかき髮に添ひ
森の香健き胸に入る

曙に風吹きかへせ
　吹きかへせ風あけぼのに
極より極に過ぎて
天より地に下りよ

＊　＊　＊

重なる歲月は移れども
忘られぬ日は稀なりや
古來の典籍を繙きて
世をば激せし蹤を見よ

無憂樹の蔭華饒く
馬槽の邊に星照らす
嗚呼その法の曙の
光もいつか影斂め
傷みてひとり嘆きつつ
懷疑の途人走る

奔放なれかかる世や
熱慕情にただ嚮へ
微闇き空いかばかり
雲華やかに染め來ずや

うち咽ぶ海またここに
潮ふたたび満ち來ずや
然らずや高き遠き見て
明けゆく磯にわが立てば
この曙に白銀の
獵箭弓弦を斷つがごと
雄々しき魂の生れいで
この曙に琴のねの
祝ひの歌を曳くがごと
やさしき魂の聲あげむ
われ今清き曙に
色と香を慕ふ時
おのづからなる命こそ
活きて極なく流れゆけ
響は浪に高くたち
光は雲に翼きて
嗚呼この清き曙に
風吹きかへせ浪鳴りわたれ

（明治三十五年一月刊）

青空文庫情報

底本：「日本現代文學全集　22　土井晩翠・薄田泣菫・蒲原有明・伊良子清白・横瀬夜雨集」講談社
　　1968（昭和43）年5月19日初版発行
　　1969（昭和44）年10月1日第2刷
底本の親本：「草わかば」新聲社
　　1902（明治35）年1月
入力：広橋はやみ
校正：岡村和彦
2015年12月13日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

草わかば

蒲原有明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/